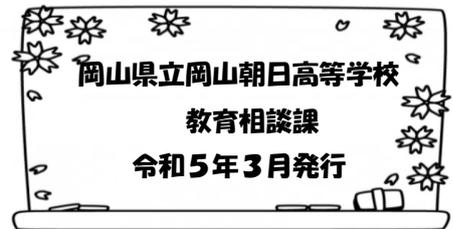


相談課 便り

* 第72号



年度のしめくくりを迎えるこの時期、1年を振り返って、皆さんの中にはどのようなことが想起されるのでしょうか？楽しかったこと苦しかったこと、それぞれ多岐にわたることと思います。新しい年度が始まる前のこの貴重な時間を、ぜひ自分自身と向き合い、次のステージでの飛躍に繋がる時間にしてもらいたいと思っています。

相談課便りでは、皆さんとともに歩み、皆さんの成長を見守る相談課の先生方のエッセイを掲載してきました。様々な角度から綴られた文章や視点、そこから新たな気づきや発見が生まれればと願っています。

娘から気付かされたこと

中谷 祐輔

私事ながら、昨年10月末に第一子となる長女が生まれました。乳児の目に見える成長の速さに、喜びと感動の毎日を送っています。新生児の頃はきっちり3時間おきに起きて泣いてミルクをねだり、またすぐ寝るという日々で、もう少し起きていてくれたらいいのと思っていたのをよく覚えています。2か月を過ぎたあたりから起きている時間が増え、穴の空いたおもちゃのボールに興味を持ち始めました。ぎこちない手つきで触るようになったかと思うと、あっという間に両手でつかみ始め、今度はそれをベロベロと舐め、振り回し、投げるなど次から次に新しい技を披露してくれます。

そんなある日、家へ帰る途中、急にシートベルトが装着されていないという警告音が鳴りました。うまくはまっていなかったかと焦って確認すると運転席ではなく、助手席のシートベルトを装着してくださいとのこと。助手席を見ると仕事用のカバンを置いていることに気付きました。「人を感知するレベルの量の荷物（教材）を持って帰っているんだなあ。けど、生徒はその何倍も多く教材を持ち運んでいるんだらうなあ。」と考えているうちに、家に到着しました。疲労感を抱えつつ、いつものように娘に「夜のおじさん帰ってきたよ。」と言うと、最近得意技となった両足掴みを披露しながら、ニコッと笑顔で私の帰宅を歓迎してくれました。教科書通りの「娘の笑顔は疲れを吹き飛ばす」を体験すると同時に、私も笑顔を心がけ、周りの人に元気を与えることができる人でありたいと決意を改めることができました。



他愛のない日常の一部

藤本 将勝

コロナ禍の中のため県外に行くのは憚られたが、息子の2歳の誕生日のとき、アンパンマンの大ファンだったので、意を決して高知にあるアンパンマンミュージアムへ行くことにした。入り口付近には、大きなダダダ音が付んでおり、それを目の当たりして、ぴよんぴよんと跳ね回っていた。その後施設へ入ると、色々なアンパンマンのキャラクターが各所に点在しており、アンパンマンを見る度に「アンパンマンいた」。どうやら施設を満喫しているようだ。最高の体験をさせることができ、リスクを負ってでも行った甲斐があった。施設見学も終盤に差し掛かり、施設のメインであるアンパンマン号やアンパンマンハウスやバイキン城などのアンパンマンの世界を疑似体験が出来る場所へと向かった。今までの様子を見ていると100発100中でどハマりしている。これは、喜ぶぞ。そう思った矢先、息子の顔がみるみるとしかめっ面へと変わっていった。バイキン城での鳴り響く轟音、閉暗所空間、普段の生活では体験できないことに恐怖を覚えたのか、それからは、「おうち帰る、帰る」の一点ばりであった。最高の思い出とともに最低の思い出も出来てしまった。複雑な心境のまま、施設をあとにした。続いて、近くにある、のいち動物園へと向かった。様々な動物たちを見て「おっきい〜、かわいいね〜」と笑顔が戻ってきた。終始上機嫌のまま、動物園を一通り見回って息子へのよい誕生日の思い出になったなどと思いつつ家路へ向かった。最近では、コロナの規制が緩和されてきているので、今まで規制によりさせることが出来なかった体験・経験を積ませてやりたいと思っている。余談ではあるが、3歳になった今でも、恐怖体験がトラウマとなり、大きな音がする場所や閉暗所空間では号泣してしまう。

名もなき家事

高岡 真衣

ある調査で、共働き夫婦の家事分担の比率というのを見た。その結果によると、夫側の回答は「夫3割、妻7割」なのに対し、妻側の回答は「夫1割、妻9割」。つまり、夫は自分では3割は家事をしていると思っているが、妻から見れば夫は1割しか家事をしていないということだ。このように、家事分担の意識に夫婦間で差がうまれる原因には、炊事、洗濯、掃除などに分けられない細かな無数の「名もなき家事」の存在があるという。名もなき家事にはどのようなものがあるか。洗った食器を片付ける、汚れたタオルをとりかえる、郵便物を確認して処分する、日用品等のストックを確認する、洗剤をつめかえる、など…。確かに家事と呼ぶにはとるに足らないようなことかもしれないが日常の中で誰かが必ずしなければならないことだ。我が家では、週末にまとめて1週間分の食材の買い物をするので、「週末までに一週間分の献立を考え、足りない食材や調味料を確認し買うものをメモしておく」という名もなき家事が地味に苦痛だったりする。ゴミ出しに関して言えば、まとめられたゴミを玄関からゴミ捨て場を持って行くことだけが「ゴミ出し」なのではなく、その前段階で家中のゴミを1ヶ所にまとめて出せるようにし新しいゴミ袋をセットすることや、ビンや缶などを綺麗に洗って仕分けておくこと全てが「ゴミ出し」なのだ。買い物に関して言えば、夫は買ってきたものを玄関に運ぶところまでが買い物だ、と思っている節がある。まだ終わってないんじゃないかと！と言いたくなるのをグッと押さえる。(ほぼ押さえきれていない。)

一昔前よりかは家事に積極的な男性が増えていることは事実かもしれないが、それでもやはり「妻の家事負担が7割以上の家庭」は全体の6割を越えているそうだ。我が家はありがたいことに名もなき家事を含めても夫はよくしてくれているほうだと思うが、育休あけ最初の年(もう何年も前だが)なんかは、慣れない仕事家事育児に負担感やストレスも大きく、なんで私ばかりという思いから喧嘩になったこともある。

家庭のなかで名もなき家事が無数にあることを意識して話し合うこと、誰かがその見えない作業をしてくれているから家庭がまわっているということに敬意を払うこと、家族一人一人が家庭で生活する家族の一員であることを意識すること、してもらって当たり前と思わず素直に感謝を述べること、などが大事なのだと思う。そういう私もなかなかできないのだが……。共働き世帯が多い今、夫婦揃って家事も仕事も気持ちよくできたら良いな、と週末子どもが寝たあと夫と一週間分の作りおき副菜を作りながら眠い頭でぼんやりと思った。

海外旅行で感じること

安藤 七彩

修学旅行後のレポートの様なおもしろくないタイトルになってしまったが、私は旅行が好きで、大学生のころは、よく授業をすっぽかして(そんなことはしないでくださいね)、旅行へ行っていた。正直、旅行は「どこへ行くか」ではなく、「誰と行くか」の方が重要だと思っているが、海外へ旅行に行ったときに楽しいと思うポイントがある。それは「言葉が通じないこと」だ。恥ずかしながら、日本語以外の言語は全く分からない(日本語も微妙ですが……)。生徒の皆さんが普段聞いている、考査や授業中のリスニングでさえ、さっぱりで、単語が少し聞き取れるくらいである。初めて海外へ行ったときは、言葉はもちろん、文化も分からないし、土地感覚もないし、スマホもあてにならないので現地の方に聞きながら旅をしなければならず、かなり不安だった。しかし、聞き取れる単語を拾い、相手の表情などを見てだんだんと、なんとなく理解が出来るようになる。私の知っている数少ない英単語を適当に並べ、大きな身振り手振りを加えたりすると相手も一生懸命聞き取ろうとしてくれ、何となく伝わり、会話のキャッチボールができる。するとニッコリしてくれたりして、ただ道をたずねているだけなのに、一生懸命聞いてくれる姿をみてとても心がほっこりする。海外旅行へ行ったら楽しいのはこれである。(優秀な朝日生の皆さんはもっとスムーズに海外旅行を楽しむことができますと思いますが……。)

さて、何が言いたいのかと言うと、言葉の通じない人と話をして感じるのは、コミュニケーションを取る上で、相手の伝えたいことの真意を「聴きとろうとする」ことがとても大切なのではないかということだ。全部が分からなくても良い。「理解しようとしてくれている」だけでもとても嬉しいものだ。日本語で話をする、言葉は伝わるが「ちゃんと伝わっているのかな？」と不安になることがある。コミュニケーションを取る上で大切なのは、もしかしたら語学力よりも、表情を見たり、共感したり、元気が出る一言を添えたりするなど、一生懸命聴こうとする姿勢ではないかと思う。これは「聴いてもらっている、この人になら話をしたい」と思ってもらえる、一番簡単で一番重要な聴くテクニックだと、海外旅行から帰ってくると毎度感じる。

ショッピングをしたり、おいしい物を食べるなどの本来の目的も、もちろん楽しいが、些細なやりとりだけで気づきが増えるという、国内ではなかなか感じるこのできない楽しみもあるので、海外旅行をぜひ体験してほしい。

コロナが終わったらタイへ行きたい……(ダジャレを言いたいわけではありません)。

